高知県立坂本龍馬記念館だより　2014（平成26）年4月　第89号

高知県立坂本龍馬記念館　The Sakamoto Ryoma Memorial Museum

飛陽（ひとう）

海援隊旗（二曳きの旗）

http://www.ryoma-kinenkan.jp

人生航路 JINSEI KORO

新年度への決意

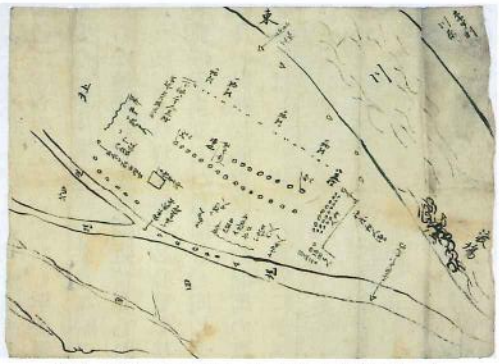
新年度、館では企画展と同時に、いくつかの龍馬発信イベントを用意した。最初は4月早々の13日(日)、県民文化ホールでの示野由佳さんとディーター・パッシングさんによるオペラリサイタル。高知出身で、オーストリア・ウイーンで30年にわたって声楽家として活躍中の示野さんの〝オペラ披露〟だが、第2部は「お龍と龍馬」、龍馬記念館制作の〝愛の讃歌〟となる。ところでこの歌が世界へ平和発信を行っているウイーンのハプスブルク家主宰の「平和の炎」団体の目に止まるという幸運に恵まれた。あっという間に龍馬へ「平和の炎賞」授与が決まった。5月にはウイーンで授賞式である。8月はよさこい、そして同月15日、終戦記念日には、終戦の日に誓う「第2回　夏休み子ども・龍馬フォーラム」が決定している。11月の龍馬月間は、龍馬生誕日15日(土)は桂浜で手筒花火、16日(日)は桂浜の龍馬像と館前のシェイクハンド龍馬像間を人と人の握手でつなぐ〝レッツゴー!ハンドインハンド〟が行われる。その日は「龍馬まつり」でもある。龍馬は今年も熱く燃える。

森　健志郎

「国難に殉じた土佐の志士」展

―池田屋事件・禁門の変・野根山事件―

平成26年4月1日(火)～7月4日(金)



野根山党処刑時略図（土佐藩京都藩邸史料）

無謀さを悟る

今年は元治元年(1864)から数えて150年になる。元治元年前後は、幕末の大きな転換期である。

薩摩藩は生麦事件の報復として、文久3年7月、薩英戦争でイギリスに敗れた。長州藩は、文久3年5月に下関で攘夷を実行した報復として、翌元治元年8月、4カ国連合艦隊に下関を占領された。さらに、長州藩は文久3年8月18日の政変で京都から追放され、翌元治元年7月、禁門の変を引き起こす。

この時期は、攘夷派の敗北が決定的になる時期で、薩摩藩や長州藩は、外国との戦争を経て単純な攘夷（小攘夷）の無謀さを悟り、方向転換を行う。また、諸藩を脱藩した志士らも、天誅組の変や池田屋事件、禁門の変を経て攘夷派が衰退していく。土佐でも尊王攘夷派の土佐勤王党が弾圧され、野根山事件などが起こった。

国造りの模索

このような経験に基づいて、薩長や志士らの間では、単純な攘夷ではなく、国が一つにまとまり、国力を高めた上で、侵略されない独立国家を築く、という大攘夷の考え方が主流になっていく。その際、幕府は頼りないため、天皇を中心とした国造りを模索し始める。こうして、龍馬や慎太郎の活躍の下地が出来上がるのである。

失ってしまった国を思う志士

本展では、元治元年に起こった事件の内、土佐藩の志士が関わったものを取り上げ、命を落とした土佐の志士の紹介を行う。

特に、池田屋事件では北添佶麿など。北添は土佐藩岩目地の庄屋の家に生まれた。文武に秀で、庄屋としても周りの期待に応える仕事ぶりで、非常に有能だった。また、先見の明のある人物でもあり、文久3年5月には蝦夷地の視察に赴いている。龍馬とも親交があったと考えられ、龍馬は翌元治元年6月に、本格的な蝦夷開拓を企画している。

その他、禁門の変で亡くなった松山深蔵や、土佐で起こった野根山事件の首謀者である清岡道之助、慎太郎が信頼を寄せていた新井竹次郎などを取り上げる。

龍馬は慶応元年9月の手紙で土佐藩のことを「何の志ざしもなき所」と評している。この時期の土佐藩は、志士に対する理解が不足しており、国を思う志士の多くは脱藩して危険な場所に身を置いた。そして、多くの有能な人材の命を失ってしまった。こうした若い志士のことを少しでも知っていただけたら幸いである。

三浦　夏樹

学芸員の視点「真物と複製」

複製にも重要な役割

「龍馬記念館だから期待して来たのに、龍馬の手紙が複製ばかりでがっかりした」。当館の来館者アンケートにはよくこう書かれる。実は学生時代、初めて龍馬記念館を訪れた筆者も同じ感想を持った。がっかりした来館者の気持ちはよく分かる。しかし、いざ龍馬記念館の学芸員になってみると、やむを得ない事情が多々あることも今は分かる。

亀尾美香 学芸員

博物館を訪れる醍醐味は、何と言ってもオリジナル（原資料）を生で見られることである。原資料は世界に一点しかない。著名で重要な歴史資料は、それだけで見る者に感動を与える。そのために入館料を払って博物館を訪れるといっても過言ではない。原資料を展示しない館は、そういう観点で訪れる価値がないと見なされても仕方がないかもしれない。

展示する理由

しかし、複製展示が皆無という博物館もまた稀である。博物館が複製を展示する理由は、主として原資料を保護するため、あるいは原資料を所有しないがどうしても展示の必要があるためである。

当館が該当するのは主に後者である。龍馬書簡の真物は現存する100点あまりのうち、当館が寄託を含め5点を有するのに比し、高知県立歴史民俗資料館が10点、京都国立博物館が9点を蔵し（平成26年3月現在）、他も機関・個人がバラバラに所有している。複製は毎年少しずつ製作しているが、真物は稀に市場に出ても価格が高騰し、非常に入手困難である。借用も、貴重なものだけに展示環境などの条件が整わなければままならない。

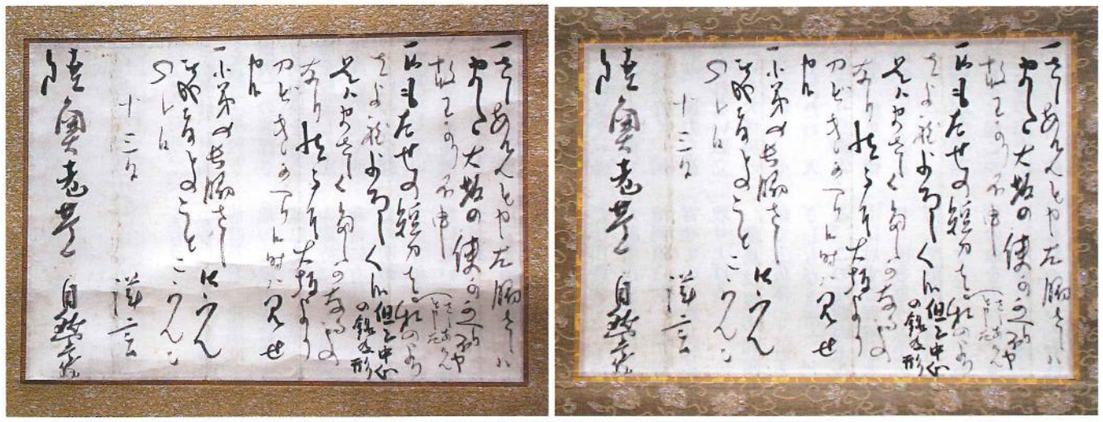
そういった事情でやむなく複製を多く展示しているが、複製といってもコロタイプ印刷という特殊な技術で作られた精巧なものである。価値としては勿論真物に劣るが、龍馬独特の筆跡を、写真やコピーなどと異なり、実物に近いかたちで見られる点では十分であろう。それに、他館や個人が所有する真物は展示される機会が少ないが、当館では複製ではあれ龍馬の書簡を常時展示しており、いつでも見ることができる。

資料守り伝えるため

という説明をよく来館者にするのだが、やはり原資料に勝るものはない。当館でも5通の真物は、可能な限り展示することにしているが、展示するとどうしても劣化が進む。多くの人に龍馬の真筆を見ていただきたい一方で、一点しかない原資料を大切に守り伝えていくのも学芸員の重要な仕事である。今生きている私たちが龍馬の真筆を間近で見られるように、100年後、200年後の未来に生きる人たちにも、同じように良い保存状態を保った龍馬の真筆を見てほしい。龍馬の書簡にかぎらず、全ての歴史資料にそうあってほしいと、学芸員である筆者は切に願っている。

真物を求める気持ちはよく分かる。その上で、展示する側にも事情があることをご理解いただき、当館の複製展示をご覧頂ければ幸いである。

亀尾　美香



慶応3年11月13日陸奥宗光宛龍馬書簡（左）真物（右）複製　当館蔵
写真で見ると違いはほとんどわからない。

妻 眞喜子が語る「作家・宮地佐一郎の思い出」⑤

聞き書き

最終回『忘れえぬ交友譚』

①小曽根均氏（左）と宮地佐一郎・眞喜子夫妻＝三鷹市の自宅で

幸せな時間

眞喜子の目の前には、土佐の海が広がっている。遠くには山なみが連なる。移り変わる風景の妙を追うように、眞喜子の話も過去に連なっていく。

かつて、夫の佐一郎と〝脱藩〟した土佐で眞喜子は今、穏やかな時間を過ごしている。

終戦を韓国で迎え、引き揚げた両親の故郷高知で、眞喜子は佐一郎と運命的な出会いをし、二人で上京した。

作家の妻となった眞喜子は、持ち前の明るさで、夫ともども様々な人たちとの交流を楽しんだ。

「亀井（勝一郎）先生は、本当に可愛がってくださったわね。佐一郎さんとは愉快にお酒を飲んでいらした」「大佛（次郎）先生との最後は、鎌倉の山に登った日でした」。

「中野文枝さんとは旅行をしたり、着物をいただいたり。私たちはしょっちゅう笑い転げていましたよ」。

「田岡典夫さんや田宮虎彦さん、上林暁さんたちがやっている高知出身文人の囲碁の会に、佐一郎さんの代わりに私が行ったこともあります。碁が苦手な佐一郎さんは、負けるのは嫌だって（笑）」。

②森茉莉氏と＝太宰治の桜桃忌で

③安岡章太郎氏と＝高知城追手門で

「幸せな時間だったわね。あの作家たちの空気の中で泳いだ、幸せな時間…」。

眞喜子はしみじみとつぶやいた。

作家の妻として

「でもね、辛いこと悲しいこともありましたよ。母に訴えると、『あなたは作家の奥さんになったんでしょ』と冷たく言われました。母の愛情でしたわね」。

佐一郎は、子どもを連れて野球観戦に出かけても子どもに構わず本を読んでいるような人だった。そんな父を息子は「自分の世界しか持たない人だ」と言った。

「今思えば、佐一郎さんはどういう感情があるか分からない子どものような人でしたね。だから、もっと気楽にやりたいことをさせてやればよかった」。

眞喜子は瞬間、目を伏せた。

が、一呼吸。「それでもね、面白い人生でしたよ」と明るく顔を上げた。その視線は、はるか山なみの彼方に向いていた。

宮地佐一郎が逝って9年が経った。しかし、眞喜子をはじめ、私たちからその思い出や業績が消えることはない。

（文中敬称略）

前田　由紀枝

①海援隊ゆかりの長崎小曽根家第16代当主
②エッセイスト、小説家。森鴎外の長女で、料理の腕前も有名
③小説家。『流離譚』では幕末の勤王家である自身の一族をテーマにした
④元プリンストン大学教授。外国人初の龍馬研究家
⑤歴史家。龍馬研究の第一人者。『坂本龍馬全集』監修ほか
⑥小説家。『竜馬がゆく』は龍馬人気を不動のものにした
※（眞喜子を除き写真の人々はすべて故人）

⑥司馬遼太郎氏と

⑤平尾道雄氏と＝土佐史談会で

④マリウス・B・ジャンセン氏と

龍馬に「平和炎賞」オーストリア ハプスブルク家主宰

「平和の炎」団体から　きっかけは「お龍と龍馬」愛の讃歌

示野由佳&ディーター・パッシングリサイタル

坂本龍馬記念館の新年度、最初の龍馬発信は４月13日県民文化オレンジホールである。高知出身でオーストリア・ウイーンに渡り、すでに30年声楽家として活躍している示野由佳さんとその音楽パートナー、ディーター・パッシングさん二人が開くリサイタルだ。二部構成のプログラムで一部は二人のオペラ曲の披露、そして二部“お龍と龍馬”はこの日のために用意したオリジナルの“愛の讃歌”である。なんとこれにウイーンのハプスブルク家が注目するというおまけがついた。もちろん示野さんを介してだが同家が世界へ平和発信団体として運営している「平和の炎」と龍馬の平和発信の根拠が同じだということになり、龍馬に平和の炎賞を授与したいということになったのである。授賞式は５月15日ウイーンと決まった。今度はヨーロッパで“龍馬発信”である。

オペラリハーサル風景

外人の〝龍馬さん〟

示野さんとディーターは2月28日高知に帰ってきた。3月4日から早速リハーサルを開始した。一部はウイーンの延長だから難しくはない。問題は初公演の「お龍と龍馬」だ。脚本は館の前田由紀枝学芸主任が書いた。作曲は濱口賢策先生、ピアノ伴奏は大野日菜さん、ナレーションはアナウンサーの森博和さんにお願いした。皆さん地元である。場面は霧島山。一面ツツジ満開。お龍と龍馬は刹那の憩いのひと時を楽しむ。お龍の思い付きで、山頂に平安の象徴として埋めてある逆鉾を〝抜いてみよう〟などというふざけたことになる。龍馬と二人で呼吸合わせて「エイ！ヤッ！」。終わればカステラをぱくつく。楽しむ二人の笑い声が聞こえてきそうである。龍馬とお龍のおなじみの新婚旅行光景だ。

そして場面は一転現代へ。揺れる世相を目撃した龍馬が今度は〝地球の洗濯〟に向かうという筋書きである。龍馬、龍馬と呼ぶ声に誘われて下界へ降りてきた龍馬、いつまでも龍馬のことが忘れられないお龍。二人が出会うのである。中で特に注目してほしいのはやっぱり、龍馬。龍馬役をディーター・パッシング、外国人が演じることだ。日本語で歌うのも難しいのに、土佐弁も入る。高知に来たディーターに「練習していますか？」と聞くと「任せてや、ばっちり練習やりゆうき、心配無用ぜよ！」立派な土佐弁、笑顔付きであった。本番がたのしみである。

今度はヨーロッパに龍馬発信

さて、「平和の炎賞」である。歌う示野さんと龍馬に「平和の炎碑」の授賞が決まっている。龍馬記念館は龍馬の〝代理〟で賞をいただくようなものである。しかし、館としてはなんといっても平和発信の龍馬に対する賞としてこんな名誉なことはない。

もちろん入館者の皆さんにも見ていただこうと思う。先のハワイ、ニューヨークでのアメリカフォーラム、龍馬を尊敬する台湾、李登輝元総統を訪ねたツアー、今回のウイーンは初めてのヨーロッパとなる。龍馬はいよいよ世界に向けて動き始めた。

また、今回の受賞に当たり、チャリティスポンサーとして、「坂本龍馬財団」「株式会社第一コンサルタンツ」にご協力いただきました。ありがとうございます。

森　健志郎

ASSOCIATION FOR THE FURTHERANCE OF PEACE
FLAME OF PEACE

観光地である博物館として目指すべき方向を探る

リニューアル基本計画委員会第２回

１月29日に第２回目のリニューアル基本計画委員会が高知市の高知会館で開かれた。

現在の当館は、博物館として足りない部分がある。しかし、認知度が高まるにつれ、来館者からの要望はどんどん高くなっており、博物館としての機能を整えなければ要望を満たすことができない状況になってきている。例えば、単純に「実物資料が見たい」という要望も、現在の展示室の状況では、他館から貴重な資料を借りにくい。

こうしたこともあって、リニューアル、もしくは別館を建てる構想で検討委員会を開いており、第２回の会議では、利用者に求められていることは何か、そして当館が目指すべき方向性はどこか、を整理することとなった。

収集保存・調査研究・教育普及・観光振興でも論戦

全体としては「龍馬を求める人々の思いに応えられる博物館施設」と、桂浜という高知県随一の観光地にある博物館として「建物の立地条件を活かした魅力ある観光文化施設」という2本の方向性を確認した。

また、収集保存の方向性としては、「龍馬とその時代に関する資料を収集する」。その際、時代に関する資料については、県内他館とのすみ分けの議論が必要となる。さらに、龍馬だけでなく、広く幕末土佐藩の人物に関連した資料も収集対象とすることを確認した。

そして調査研究は、学芸員による研究は勿論必要だが、開かれた博物館として、閲覧機能を充実させ、調査研究のセンター的な機能を果たせるような方向を目指すべき、との意見があった。展示は本物にこだわり、今の保存に関する技術を取り入れ、できる限り本物を見せていくことを考えるべきとのご意見もあった。

その他、教育普及や観光振興についてもご意見をいただいた。第3回以降は、目指すべき方向性を満たせるような館にするべく、より具体的な検討を進めていく。

三浦　夏樹

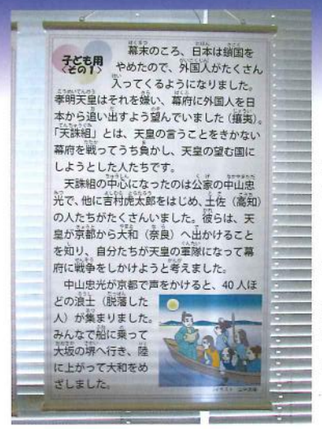
県外からの熱い来客

「天誅組の変150年」展　終わる

平成25年(2013)で150年を迎えた「天誅組の変」に関する企画展が、3月31日をもって終了した。期間中、ゆかりの地である奈良県五條市の「維新の魁・天誅組」保存伝承・顕彰推進協議会の皆さまや、天誅組総裁のひとりである松本奎堂の出身地・愛知県刈谷市の竹中良則市長など、県外から熱心なお客さまをお迎えできたのは嬉しい出来事であった。反面、土佐出身者を中心に紹介したものの、その人たちが地元高知でどれほど認知されているかを考えると、少々心許ないところがある。

今回展示を担当して、天誅組に関する資料が非常に少ないことを実感した。特に地元高知には、吉村虎太郎ら天誅組に参加した一部の志士の資料（書簡など）以外の資料がほとんどない。資料の発掘や事実の洗い出しなど、地道な作業を今後も継続していく必要性を強く感じた。

亀尾　美香



子ども用パネル

展示風景

拝啓 龍馬殿

平成25年12月21日～平成26年3月20日

82通

龍馬殿は剣術修行で、なぜか？もし柳生流を選ばれました北辰一刀流を選ばれ、「殺人刀、活人剣」を学ばれ、柳生流の極意とも言える「無刀取り」を身に付けておられたら刺客に襲われたときにも窮地を脱することができたのではないかと思うと残念でなりません。旅の素浪人（戸山流兵法修行者）剣道教十七段　K・I。現在、日本一周稽古の旅に出ていて立ち寄りました。昨日までに訪ねた道場が199ケ所。稽古相手が2213人になりました。

（12月22日　岐阜　K・I　69歳　男性）

私は記念館へ来たのが初めてで、とても心が癒されました。さて、龍馬さんに質問なのですが、どうして日本は不平等なんですか？学校でも日常生活でも思っています。龍馬さんが大好きなので聞いてみました。もしよろしければお返事ください。待っています。

（12月22日　A　15歳）

今年もあなたに会いに来ました。そして今年もあなたに元気をもらって帰ります。ある人が「日本がピンチになると『人物』が現れてこの国を救う。幕末のときは坂本龍馬だった」と言っていました。ならば今のこの日本を救うのは俺だ！というのは無理な話ですが、少しでも社会のためになれるよう、私も志を持って努力していこうと思っております。毎年あなたに会ってあなたからもらうこのエネルギーを武器に明日からも〝戦って〟いきます。

（12月26日　奈良　N・I　50歳　男性）

私は中学2年生です。日常生活の中でも新しいことに挑戦したり、多数の意見に流されないことはなかなかできません。だから自由奔放でチャレンジャーで一生懸命な龍馬殿をとても尊敬しています。あなたのことをもっと知りたいです。私も自分らしく龍馬殿のようにチャレンジ精神溢れる生き方をしたいです。天国からどうか見守っていてください。

（1月1日　兵庫　Y・K　13歳　女子）

海を眺め、戦時中の事を思い感無量です。平和はすばらしいです。

（1月3日　徳島　Y・U　83歳　女性）

ここは波の音が聞こえます。私もあなたのような志と、それを実行する行動力をここ土佐に来て感じてみたく、ようやく訪れる事ができました。静かに心を落ち着かせ自分と向き合う旅の出発点がここ土佐でよかった。皆が幸せになれる時代を創ってくれた先人達。それを手に入れることが容易なのにそれをしない現代人。自分を愛すること、そして他を想い知ること。小さな企業が大きな志をもって、これからまた愛知に戻り命を使い果たす。果せる生き方をしてまたいつの日かここへ報告にまいろうと思います。有難う御座います。

（1月17日　愛知　S・O　36歳　男性）

3年前に初めて来ました。『龍馬がゆく』を読み、『龍馬伝』を見て感動しました。以来大ファンです。私はかけおち同然の結婚をし、身分差別を受け、両家の縁も結べず、子どももできない結婚生活でした。6年目にしてようやく長男を授かり、両家を結び付けてくれたこの子に恐れ多くも「龍馬」と名付けました。両家の無血開城。まさに大政奉還でした。家族でこの太平洋と龍馬さんの志を見て、明日からまた頑張れます。

（2月1日　広島　D・F　36歳　男性）

今、日本はグローバル化という黒船の来航により、社会は右往左往しています。我々は龍馬さんより託された今をしっかりと歩み、次の時代につなげていけるように努力します。日本の未来に乞うご期待！

（2月9日　兵庫　A・K　35歳　男性）

ずっと想い焦がれた高知をやっと夫と訪れることができました。貴方もご存知かと思いますが、日本の国は物質的豊かさを求めて、古い時代にあった人の「心」という大切なものを遠く置き去りにして進んできました。少年少女の自死、我が子への虐待、親殺しなどの事件に心が痛むばかりです。貴方が命がけで守ろうとしたこの国。そして失った人と人が真の意味での関わりを取り戻せることが出来れば…。貴方の手紙の一枚一枚を読みながらそんなことを思っています。どんな時代になっても己の心を忘れずに生きてゆかなければ。貴方に負けないように。

（2月9日　栃木　A・H　53歳　女性）

やっと高知に来ました。東京は何十年ぶりかの雪。欠航になるかと思いきや、やはり龍馬さんは待っていてくれた！この太平洋を見ていると本当に心が広くなる。海の向こうに広がる世界に思いを馳せた気持ちがよく分かります。龍馬さんに悩みを打ち明けたところで解決することはない。でも自分の気持ちに正直に笑って生きていくことは、ここに来て改めて思わざるをえません。ありがとう。楽しく生きていけそうです。

（2月9日　愛知　T・M　61歳　女性）

龍馬さんからいただいた「馬」の字が名前にありうれしいです。自分の名を探しに来た旅でした。

（2月17日　大阪　K・T　21歳　男性）

龍馬さん、はじめまして。大学時代に司馬遼太郎著の『竜馬がゆく』を読んで以来のファンです。あれから30年が過ぎ、50才になった今はじめて龍馬さんに会いに来ることができました。昨日は快晴の中、高知龍馬マラソンに出場。3時間34分という自己ベストで苦しくも楽しく走り抜きました。高知の街中、桂浜、海岸線を見て廻りましたが、本当に良いところですね。龍馬さんが剣の道、ピストル、商取引と時代の変化をよみながら生き抜いたように、私もその魂を見習って雄々しく生きていきます。またお会いしましょう。今度は妻を紹介します。

（2月17日　千葉　F・T　49歳　男性）

長年の念願が叶い高知に来ることができました。先日の龍馬マラソンも初フルマラソンながら完走することができ、この高知の自然とおもてなしに大変感謝しています。龍馬さんの時代は現代のように移動手段が無かった訳ですが、いったいどのくらいの距離を歩き、走ったのでしょうか？晩年は日本の夜明けに向けて休むことなく走り回ったことでしょう。おかげさまで今の日本があります。もしもあと10年長く生きていたとしたら、どんな世の中になっていたか想像がふくらんでしまいます。私はあなたのようなユーモアと人望はありませんが、しっかりと「志」を持って生きていきます。

（2月18日　愛知　Y・M　34歳　男性）

はじめて来ました。人生48年間、一度も四国にきたことがなかったのですが、今回龍馬さんをめぐる旅と、高知龍馬マラソンをかねて瀬戸大橋を渡ってきました。あなたの原点の高知はよいところですね。龍馬さんのように大きな気持ちでいつもいたいです。またどこかでお会いできると思います。次は長崎かな。大きな気持ち忘れません。

（2月18日　無記名）

大阪から家族旅行で高知へやって参りました。高知は風光明媚で、料理がおいしい素晴らしいところですね。すっかり高知を好きになってしまいました。さて僕は来る4月より京都で一人暮らしを始めます。身の回りのことを自分で行い、同時に両親への感謝を忘れないでおこうと思います。暇なときで構わないので見守っていただけると幸せです。

（2月23日　大阪　Y・F　20歳　男性）

龍馬さんまた高知に来ました。あなたの生まれた高知はいい所です。あなたが亡くなった京都から来ました。私はあなたが生まれてから120年後に生まれました。同じひつじ年の大先輩のあなたを尊敬しております。私は今あなたの妻・お龍さんの父が亡くなった六角獄舎の跡地に住んでいます。これも何かの縁と思われます。尊敬する龍馬さんへ。また来ます。

（2月24日　京都　M・K　58歳　男性）

僕の夢は目が見えない人たちの目を見えるようにする薬、または医術を身に付けることです。あなたが努力すれば報われる日本にしてくれたので、僕は懸命に努力し、大学に合格することができました。大学に合格することはゴールではなく、スタートだと思っています。これから6年間つらいことがあると思いますが、自分が納得いくまで、最後まで全力を出し切ります。空から見守っていてください。

（2月24日　兵庫　N・O　19歳　男性）

＊＊＊編集者より＊＊＊

猛暑に大雪、無差別殺傷事件、世界の各地で起こる争い。荒れる時代を身近に感じるようになってきました。「平和」は当たり前にそこにあるものではなく“守っていかなければならない”時代になってきたように思えます。龍馬の手紙から読み取れる彼の考え方や行動からは、混乱の時代を生き抜くヒントが見つかります。龍馬の手紙ぜひ読んでみてください。　尾﨑　由紀

ここは館長の部屋　森　健志郎

別館の夢正夢に！

坂本龍馬記念館の泣き所を教えよう。ズバリ、開館以来20年を越した建物の老朽化。入館者の皆さんには、総ガラス張りで太平洋に乗り出す船のイメージがまさに龍馬の雄姿だと好評である。大学の建築科の学生たちがそのために勉強に来ることも珍しくない。まこと、沖からでも遠くからでもブルーとオレンジ色の化粧はよく映えて、目立っている。ところが、総ガラス張りモダンスタイルが、裏返せば泣き所なのだ。観光地桂浜ではスタイルは申し分なし、ところが史料保管を最優先する博物館機能からすれば最悪となるわけである。

こんな経験もした。台風接近、南東から打ちつける風と雨。それがある一点を超えた時、雨漏りが始まった。事務室は何とか我慢した。しかし、地下展示室に降りていく階段の天井からぽたぽた。ちょっと間違えば展示室直撃となる。あわてて並べた雑巾入りのバケツが10個近くになった。ハラハラしながら台風通過を待ったものだ。〝観光地の中にある博物館〟。まさに乱世の渦中の龍馬を見るようではないか。

この難問についに行政が腰を上げた。昨年末から始まった「坂本龍馬記念館リニューアル検討委員会」のスタートである。京都国立博物館の宮川禎一学芸員を委員長とする文化教育、観光の立場の8人で議論を深める。すでに、3回の会で方向が見えてきた。本体はそのままに、収蔵庫、展示室、講義室を備えた別館構想である。まさに〝夢の別館〟。洋風、和風、ステージのある講義室、本物の並ぶ常設展示室。ジョン万次郎ルームなど・・

ああ！夢でも楽しいぞ!!

初回、〝博物館の心臓〟現在の収蔵庫を見学した宮川委員長が言った「うち（京都国立博物館）と資料の貸し借りができるような別館にしたいですねえ」。まさに！現在の収蔵庫では貸すことはできても借りることができないのである。借りる側の態勢不備というわけ。ただし、これだけは知っておいてほしい。館の史料の中には国の重要文化財に匹敵するようなものもあることを。

ともかく何より「夢の別館」を正夢にと念ずる毎日である。

平成26年度　第6回「現代龍馬学会」　総会・研究発表会

「変革の時」をテーマに龍馬の生き様を多角度から　研究発表は6人

第6回「現代龍馬学会」が5月17日（土）国民宿舎「桂浜荘」の地下大会議室で開催される。今年のテーマはずばり「変革のとき」。経済発展を人間の幸せの究極のキーワードのごとく政治、社会、地球全体が揺れている現代、今回の龍馬学会は時を得た開催となった。総会に続く基調講演は「坂本龍馬と長宗我部元親」と題して長宗我部家17代当主、長宗我部友親氏が龍馬・元親の秘話を熱く語る。その後、龍馬記念館の学芸員を含む6人の先生方がそれぞれの分野で龍馬の時代を、また、龍馬との繋がりを解説発表する。最後の締めくくりは今回の宣言文の作成、発表だ。そして夜は先生方を囲んでの〝龍馬談義〟で盛り上がろうという段取り。もちろん研究発表会、懇親会いずれも参加は自由。大勢の人の参加を待っています。

佐々木　恵

日程と基調講演と研究発表者

日　時：2014年（平成26年）5月17日（土）
総会9：00～、研究発表10：00～

【基調講演】
長宗我部友親氏　長宗我部家17代目当主
「坂本龍馬と長宗我部元親」

【発表者】
網屋喜行氏　鹿児島県立短期大学名誉教授、吉田孝継子孫
「明治維新の変革と「吉田東洋」一族の生き方・本家の「孝継」と分家の「正春」について」
加藤貴行氏　花月史跡研究会、現代龍馬学会会員、長崎龍馬会専任講師
「幕末維新期の長崎について」
神谷良昌氏　沖縄ジョン万次郎会員
「琉球に上陸したジョン万次郎」
植田　英氏　現代龍馬学会員
「龍馬のもう一人のお祖父ちゃんの墓所」
渡辺瑠海氏　エッセイスト
「坂本乙女・はちきんの武士道」
三浦夏樹　坂本龍馬記念館学芸員
「坂本龍馬の倒幕論についての一考察」

参加費無料・要申込（先着120名様）。
詳細は当館ホームページでも随時お知らせいたします。
お申込み・お問合せは坂本龍馬記念館まで。

海の見える・ぎゃらりい

■「龍馬飛騰ー海援隊士面々」予告

4月26日(土)～5月31日(土)の展覧会

「龍馬・海援隊に魅せられて」

私の本業は仏画家です。

それが肝心の仏画を脇に置いて、此のところもっぱら日々龍馬とその仲間たち、つまり海援隊士を描いています。

土佐の写真家井上俊三撮影とされる、龍馬が台に寄りかかった有名な写真があります。決してハンサムとは言い難いけれど浪人体でこだわりの無さが自ずと滲み出ていい。更にそのまま椅子に座り両手を組んで遠望する像もあり、これ又すこぶる好いですね。この表情に魅せられて絵筆を執りはじめ、すっかり夢中になってしまいました。本業を忘れさせてしまう龍馬の魅力でしょうか、魔力でしょうか。

龍馬・海援隊士面々

不運もまるでパワーとするように夢を追い続ける龍馬に、共感の熱意を抱いて共に奔走する同志たち、白袴で闊歩し、いささか無頼の気味を感じますが、潮風に吹かれ汗臭い若者たちの溌剌の行動が目に浮かんでくるようです。「海援隊約規」に「…互ニ相勉励、敢テ或ハ怠ルコト勿レ」とあるように、意欲に燃え怠る者などなく、隊長を信頼し、個性豊かな隊士一人ひとりが、その持てる才能を生かし、俊敏に動き、世界の海援隊を目指すわけです。

天気は晴朗、「船が出るぜよ！」という龍馬の掛け声に「おおう！」と呼応する隊士たちの声が聞こえてくるようではありませんか。そんな頼もしき面構えの行動する若者たちを作品に描けたら面白いだろうと私もまた龍馬の声に促され、絵筆を走らせているような気がします。

さて、本人が面白がって夢中になる程に、作品を観る人が共感の血をたぎらせてくれるか気になるところではあります。

いずれにしても幕末の動乱期に、紅白の二曳きの旗を翻し、希望を乗せて世界に船出する若者たちを夢想しつつ、今日も絵筆を動かしています。

江本　象岳

■「早くもよさこい準備」

H25年8月10日記念館前でのよさこい祭り出陣式

龍馬記念館の慌しさが最近さらに増してきている。

その理由はというと……4月13日に開催される「示野由佳＆ディーター・パッシングリサイタル」がもう間近にせまってきているからだ。

内容はウィーン在住オペラ歌手のお二人が『お龍と龍馬～愛の讃歌～』をテーマに歌うリサイタルコンサートなのだが、なんとそのリサイタルによさこい踊りが登場することになった。よさこい踊りを披露するのは龍馬記念館もスポンサーとして関わっている“桂浜・龍馬プロジェクトぜよ！”である。「えっ！？オペラとよさこい？？合わないんじゃないの？」とおっしゃる方も中にはいらっしゃることでしょう。いえいえ、それが合うんです！今回のコンサートテーマはお龍と龍馬。実は“桂浜・龍馬プロジェクトぜよ！”チームの振付はこの二人をイメージして構成され踊っているのだ。それで今回のコンサートをさらに盛り上げようと、急遽、プログラムに組み込まれたのである。

踊り子のみなさんにさっそく出演依頼の声をかけると「オペラとよさこいなんて面白いですね！ぜひ、参加させてもらいます！」などなど、気持よく快諾してくださり、「また、今年もよさこいの時期がやってくるんですね～」と早速、今年のよさこい本祭について話に花が咲いた。まだまだ、先だと思っていた夏のよさこい踊りだが、突然舞い込んできたよさこい披露に早くも夏の本祭準備にとりかからなければと嬉し忙しの悲鳴をあげつつ、慌しい日々が続いている。

さて、“オペラ”と“よさこい”みなさんにはどんな風に映るのだろう。今からドキドキする今日この頃である。

西本　有里

入館状況

2014年3月20日現在（開館以来8,118日）

◆総入館者数		3,504,495人
◆最多入館	(2010年5月2日)	6,686人
◆最少入館	(2004年10月20日、台風のため)	8人
◆2013年度最多入館	(2013年5月4日)	3,087人
◆2013年度最少入館	(2013年12月19日)	49人

編集後記

年度変わりの忙しさに今年はさらに拍車がかかっている。日本だけでなく世界中が殺気さえはらんできたように感じる。こうした時こそ龍馬の出番である。メインの企画展は「天誅組」から「国難に殉じた土佐の志士たち」へと変わり、館のリニューアル構想検討委員会は早くも3回を終えた。4月には早速県民文化ホールでの「お龍と龍馬」公演が待っている。ニュースネタには困らなかった。むしろ紙面が足りないほど。原稿は締め切り日までにそろった。皆さん、事態の緊急性を感じながら気合の仕上がりである。

（モ）

館だより“飛　騰”第89号（年4回発行）表紙題字：書家 沢田 明子氏
発行日　2014(平成26)年4月1日
発　行　高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL (088)841-0001　FAX (088)841-0015
http://www.ryoma-kinenkan.jp
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間　9:00～17:00　年中無休
入 館 料　一般500円・高校生以下無料
身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者1名
高知県・高知市長寿手帳所持者は無料

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、92円切手5枚をお送りください

私のテーマ

世に出る“塚様”

お墓と私（下）

今久保　約雄

お墓の変遷について

無縁の碑
拓本執るや
茅の葉に
顔を撫づらる
年暮の八つ刻

五輪塔は、古いお堂やお寺、また退転した寺跡、畑の隅に転がっているものなど様ざまである。五大に模った五つの部分からなり、下から地輪は方形、水輪は球、火輪は三角、風輪は半球、空輪は宝珠形で、平安中期頃から供養塔、墓塔として用いた。余談となるが、仏舎利を祀る五重塔も下より、万物を構成する五要素の地、水、火、風、空を五大に模って、五層それぞれに呼び名がある。

また同じ五輪塔で、宝篋院陀羅尼を収める塔として発展した宝篋院塔は、鎌倉期から、供養塔や墓塔として建てられている。四国の覇者だった長宗我部元親はこの式の墓である。

庶民は川石から

お墓には、その家の興りによって、形式がある。初代の墓は、庶民の場合は川石を置いた墓が多数で、二代目もまた同じだった。もちろん年代、被葬者は分らない。三代目にやっと墓碑が建っている。

わたしが見た郷士三代目の墓は、上部は山の容をして、本御影特有の淡紅色だったが、石が硬いせいなのか彫が浅く、拓本にしても読めなかった。この式の墓碑は元禄期のもので、庶民の建て始めもこの時期にあるらしい。それ以前の年号は見当たらないし、もしあれば子孫が後年に、過去帳より造ったものと推測する。その例として、才谷屋三代目の直益があげられる。

享保、元文期になれば、なぜか山の型式はなくなり、笠の付いた墓碑となる。遠くから見ても、この笠は立派ゆえに目立ち、この山間にも郷士がいた、とすぐ分る。家老級の墓碑は花崗岩だが、これらは全て砂岩である。

宝暦期になると、上部の四隅が反り上がって、先は尖って、その部分が少しだけ削り取られている（笠付きの四隅も、尖っている部分が削り取られている）。これは、勝負に賭ける人の仕業らしく、必勝のお守りと、するそうな…。

寛政、文化期になると、上部は方形。この墓碑は正方形で重量感があり、郷士の格がよく出ている。土佐藩では上士、下士とは身分の差別が顕著だったと聞くが、お墓の世界はそうでなく、むしろ下士の方が立派だった。

なくなった蔵福寺跡に残されていた五輪塔を20年以上前に基盤整備して整列させている。
南国市蔵幸寺島で

お墓文化育てよう

江戸中期に、南学の中興の祖として天文暦学の大家の谷秦山の教えは「墓は質素でいい。できれば川石で建てよ」と。これが谷家の家訓でもあり、以後は明治中期まで川石の墓だが、この教えは十里東へも伝わっていたのか、郷士の野老山家は、享保期から幕末までの二十基を川石で建てている。青い苔が付き、とても見応えのある墓石群となっている。

おおかたの人は、お墓の件について余り話をしない。また、しても相槌も少ない。そして淋しい、気持悪い、恐いと続く。しかし現世にいる限り、いつかは深い眠りに付く。そして他人は、淋しい、気持悪い、恐いと屹度いうだろう。そういう人たちを少しでもなくしたいと思うのはわたしばかりでないだろう。

高知市丹中山にある歴史的墓地公園の坂本家墓所のような雰囲気で、お墓と向き合い、向き合える、そういう文化を作り、広めたいものである。

往昔の
武威や栄えは
墓碑に出づ
維新の波か
無縁の多し

“話題人”インタビュー

オペラ歌手 ソプラノ 示野 由佳さん テノール ディーター・パッシングさん

『お龍と龍馬・愛の讃歌』ウィーンの歌声が高知に響く

今、 記念館では４月13日のオペラ公演に向けて最終リハーサルの真っ最中。

主役である示野由佳さんとディーター・パッシングさんの素晴らしい歌声に圧倒されている。

ウィーンに渡って30年。示野由佳さんは現地で確実に力をつけ、活躍の場を広げてきた。その歌声は豊かで女性的な表現力に満ちていると定評である。

示野さんをお龍に、公私ともにパートナーであるディーターさんを龍馬にした歌曲『お龍と龍馬～愛の讃歌』（脚本・前田由紀枝、作曲・濱口賢策）を発表しようと取り組み始めたのは１年前。

お龍と龍馬のように仲の良い二人に、これまでのこと、オペラのこと、リサイタルにかける思いなどを聞いた。

「土佐弁は難しいぜよ！」

――お帰りなさい。待ちかねていましたよ。示野さんにはディーターさんの通訳もお願いします。

さて、リハーサルも始まり、いよいよですね。

お二人にとっても、記念館にとっても、初めての作品『お龍と龍馬』を発表する舞台。楽しみです。

それにしても素晴らしい歌声。オレンジホールが小さく感じられました。

示野　ありがとうございます。

私たちにとっても初めての日本語による、しかも私の故郷に通じる作品。また、こうして完成されたひとつの作品を二人で歌うことは初めてです。楽しみな反面、気持ちが引き締まります。ディーターは日本語のみならず土佐弁に四苦八苦していますが。私の土佐弁指導も厳しいし（笑）。

ディーター　そう、私はガイジンです。しかも〝変なガイジン〟（笑）。

土佐弁は難しい。練習を始めたときには胃痛や体調不良を起こしました。でも、今じゃ「どうぜよ」「やりゆうぜよ」って感じ（笑）。

示野　『お龍と龍馬』はオペラとは違う発声や表現があって、本当に苦労しました。努力型の私と違ってディーターは天才肌なので理解や表現力に優れていますから、いいものにしていきます。

ディーター　私はウィーンに生まれ育ちましたが、日本も土佐も好き。初めて高知に来た11年前。桂浜で龍馬像を見たとき、初めてなのに懐かしい気持ち、親近感を感じました。

龍馬はサムライの時代をなくしただけでなく、自分の利益というものを全く考えなかった。日本という国が何を必要としているのかだけを考えた。本当に素晴らしい。

龍馬を演じるは光栄

――お二人の歌を聞くと、あまりにも自然に歌われているので、ご苦労を感じない。さすがですね。

脚本も変更に次ぐ変更でしたが、私も苦労を忘れました（笑）。

それにしても、初めての〝外国人龍馬〟なのに違和感がありませんね。お龍にしても、時代のボーダーがない。

ディーター　ウィーンでは、歴史の時間にアンドレアス・ホーファーという人のことを学びます。百姓一揆のリーダーのような人で、チロル独立戦争の英雄ですが、〝守りの人〟。

それと違って、龍馬はアクティブで、活動を仕掛けた。私はそこにとても共感します。龍馬を演じられることは光栄なことです。とてもうれしい。

また、この曲は、私の体にスーッと入ってきて、歌にも抵抗がありませんでした。本当にいい曲だと思います。素直な音楽なので、ダイレクトに心に伝わってきます。オペラ風に抒情的に歌いますので、親しんでいただきたいです。

示野　歴史上の人というのは、本人とは違うイメージになっていることがあります。私は誰かを演じるとき、素直に、自分の個性も出しながら表現します。今までいろんな国のお姫さまや女中などを演じましたが、お龍さんは故郷の身近な人だということでやりやすいですね。

また、曲も自分たちがふだん歌うヨーロッパの曲と違って懐かしさを感じます。この美しい曲の良さを少しでも多く出していきたいと思います。

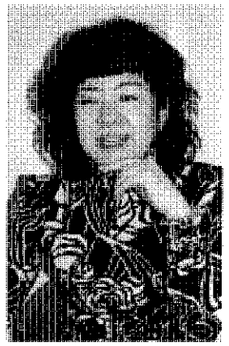
――示野さんは故郷高知への思いもおありでは。

示野　私は土佐女子高校を卒業後、県外の大学に進み、その後は長く海外で過ごしてきました。国内外で様々な人に会い、いろいろな経験をしました。

そんな中で近頃深く感じることは、私の中にある土佐人気質。この気質は私のアイデンティティですし、同じ土佐人として龍馬を大変誇りに思っています。

今年初め、朗報が飛び込んだ。『お龍と龍馬』を通じて、ウィーンの王家・ハプスブルク家主宰の平和団体「平和の炎」から、県立坂本龍馬記念館、つまり坂本龍馬に『平和の炎賞』を授与するというニュースである。示野さんたちにも同時授与される。

同賞は平和貢献する人々に与えられるもので、ノーベル平和賞受賞者、ポーランドの元大統領ワレサ氏をはじめ、世界中の平和貢献者に贈られている。日本人では3人目。歴史上の人物に与えられることは珍しい。



龍馬の平和魂か

――昨年末、平和団体「平和の炎」の総会パーティーのとき、示野さんたちが『お龍と龍馬～愛の讃歌』のことをご紹介くださったのですね。ありがとうございます。

思いがけない『平和の炎賞』授与決定でしたが、私たちは龍馬がウィーンで認められたということを、大変喜んでいます。

5月15日、ウィーンの授賞式でも『お龍と龍馬』が披露されるそうですね。

示野　『お龍と龍馬』は、愛の物語であるだけでなく、平和への深い思いの上に書かれた作品だと思います。ですから、「平和の炎」創設者で理事長のヘアタ・マルガレーテ・ハプスブルク女史の心を打ったのだと思います。

面白いことに、龍馬の海援隊旗（赤白赤の二曳き）と、オーストリアの国旗は同じデザインなのです。ハプスブルク家主宰の平和団体から受賞されるなんて、運命を感じますね。オーストリアで龍馬を知ってもらえることも素晴らしい。

今でも世界各地には政治的な不安定、民族間のいがみあい、身近にも人間関係の問題や犯罪等が溢れています。だからこそ平和を訴え、行動に移すことが大切です。「平和の炎」の活動は重要で、賞をいただくことは大きな励みになります。

ディーター　「平和の炎」は社会的に恵まれない子どもや、戦禍のあった旧ユーゴスラビアの子どもたちの支援などをしています。

ハプスブルク家は700年以上オーストリア周辺を支配し、その間には多くの戦争がありました。しかし今は、世界の平和を願って活動しています。

龍馬もまた、世界の平和を夢見た。龍馬の魂が、オーストリアと日本を結びつけた気がします。

最高の声出すために

――お二人の声やのどを大切にする神経の配り方はすごいですね。不思議なくらいでしたが、見事な声量に接し、理解することができました。リサイタルに向けて、今のお気持ちは。

示野　リサイタル前の日々、私たちは筆談や二人だけの合図で会話をします。ステージで最高の声を出すために、生活では声を使いません。オペラ歌手にとって声は命ですから。

今回、『お龍と龍馬』だけでなく、第1部ではオペラを歌います。

クラシックは手の届かない高尚な音楽だという人もいますが、決してそうではありませんよ。音楽は楽しむもの。私たちは質の高い音楽を、心を込めて歌います。故郷高知への思いを込めて歌うので、ぜひ聴きに来てください。

ディーター　（日本語で）心の底から歌うぜよ！

示野さんの公演を心待ちされていたお父さんの死。ウィーンと高知の時差。オペラの台本と『お龍と龍馬』との表現のタイムラグ。夢の中まで曲づくりする作曲家。よりよいものを作り上げようとメール、電話、スカイプなどを通して多くのずれを埋めてきた。

そんな私たちの前に生き生きとしたお龍と龍馬が現れた。オレンジホールに二人の歌声が響いた瞬間、龍馬たちが蘇った。

二組の恋人たち。幕末とウィーンから吹いてくる風。一人でも多くの方に聴いて、見て、感じていただきたい。

『示野由佳＆ディーター・パッシング オペラリサイタル』

4月13日（日）14時開演（13時半開場）
高知県立県民文化ホールオレンジホール
一般前売り1,000円（当日1,500円）
小学生以下無料
第１部：オペラリサイタル
第２部：『お龍と龍馬～愛の讃歌』

示野 由佳　しめの・ゆか
高知市生まれ。土佐女子高校、作陽音楽大学教育音楽学部（ピアノ科）卒業。1986年、ウィーンに渡り本格的に声楽の勉強を始める。以後、ヨーロッパを中心に活躍中。ウィーン在住。

ディーター・パッシング
ウィーン生まれ。幼少よりピアノ、ヴァイオリンを学ぶ。11歳でミュージカル「レ・ミゼラブル」で劇場デビュー。以後、数々の役をこなし、オペラ以外に俳優、声優も。ウィーン在住。

インタビュアー
前田 由紀枝（まえだ・ゆきえ）
現代龍馬学会理事
高知県立坂本龍馬記念館学芸主任

こぼれ話 ― 犬歩棒当記（十七）―

山内一豊の名馬

京都国立博物館　宮川　禎一

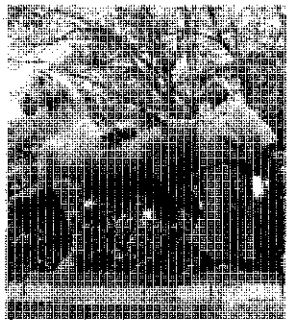
土佐を代表する歴史上の人物は坂本龍馬と山内一豊であろう。どちらも大河ドラマの主人公となった（龍馬は二度も）。しかし司馬遼太郎の『功名が辻』の本当の主人公は妻の千代（ドラマでは仲間由紀恵が演じた）であった。隠していた持参金十両で夫のために名馬を買うなどの内助の功が夫を土佐一国の殿様にさせたというストーリーである。男性にとってじつに都合のよい話だ。

ところが永井路子の『一豊の妻』という短編小説ではこれが正反対の話になっている。

ある日のこと貧乏な山内一豊は安土城下の馬市で黄金十両という高価な名馬を買って家に帰ってきた。その話を聞いた妻の千代は激怒して「そんな大金があったのなら私に着物の十枚も買ってちょうだい。俎板も買えないのに」などと一豊を責めたてたのだ。そこで一豊がいうには「家臣達に十分な給金も払えないのだが、自分が苦心して貯めた十両だ。しかし仕事に必要とはいえ馬を大金で買ったというのでは家来の手前具合が悪い。だからこの馬は妻のお前が買ってくれたことにしてあるから」と。その説明に納得できない千代だが、数日後、家臣たちの様子がおかしいことに気付く。「奥様、城下では大変な評判ですよ。山内氏の奥方は旦那様想いのとても良い奥方だ。貞女の鑑だと」。千代はその噂を否定することもできず「まあそれほどのことでもございませんわ。オホホホ」などと上機嫌だ。一豊は「してやったり」と思うという話である。

以前、永井路子先生にお会いした際にこの小説のことを「面白いですね」と申し上げると、笑いながら「冗談みたいな話なのよ」というお返事であった。「女性の立場から歴史を見る」というのが永井先生の基本だ。

「仕事に絶対必要だから」とドイツ製高級乗用車を買いたいと夫が言いだしたなら、奥様はへそくりを出しますか？皆さまのご家庭ではいかがであろうか。



コラム・龍馬のこと

「幕末のキリスト教の話」

現代龍馬学会員　鈴木　典子

坂本龍馬の率いる海援隊や、当時の勤王の志士がキリスト教の教えを受けていたことは、歴史家の間ではよく知られている。私の先祖、池道之助の日記にもキリスト教に関する話が記されている。龍馬の活躍していた時代、中浜万次郎と共に長崎に赴いた道之助の日記を訳してみるとよく「サンデーに行く」という言葉が出てくる。チェックを入れてみると、その言葉は七日ごとに記されている。そこからこれはサンデーサービス（日曜礼拝）のことではないかと気が付いた。

私はクリスチャンですから、この記録を見た時胸が躍った。私の先祖、道之助も礼拝に出かけていたと思うと、手に本を持った袴姿の道之助が、長崎の町を歩いている様子が想像される。「今日フレンチからアメリカの教師になる・・・」などの文面を見ると、それは〝宣教師の入れ替えではないのかな、などと考える訳だ。

キリスト教と言えば、迫害の歴史を避けては通れない。こんな記述もある。「浦上ミノとその一族捕えられる。切支丹衆の故なり、実に気の毒なことなり」。数年前、調査に長崎へ行った。土佐商会の跡地にある展示場で案内役の方から詳しく説明を受けた。三度行われた切支丹狩りの中でその記録が最大で、千名以上の切支丹が捕えられた。彼らは五島列島、熊本、高知、徳島などに送られたと考えられる。彼らは再び故郷に帰ることは許されずその地に根を下ろし、布教活動を続けたのだろうと。

後に熊本バンド、高知バンド、徳島バンドなどと呼ばれたようにそこが、キリスト教の盛んな地域であったことを伝えている。

“話してみるかよ”

「まち歩き」の魅力

現代龍馬学会　森本　琢磨

最近、仕事の関係上から高知市の上町（かみまち）の史跡巡りに久々に参加した。上町とは、坂本龍馬が生まれた町であり、かつて郷士や町人らが住んでいた地域である（上士が住む地域は「郭中」と呼ばれる）。残念ながら、同町における当時の建物は空襲等によってほとんど残っていないが、所々に存在する碑や看板が歴史を物語っている。また、当時からの姿を留めた場所もいくつか存在しており、郭中と上町を分ける堀の一部や「水通町」の名の由来となる水路がそれである。史跡を巡ると、「龍馬や近藤長次郎がここを通ったであろう」などと想像力を掻き立てられる。

このような「まち歩き」への取り組みは、上町だけでなく、高知県内において様々な形で進められている。高知市に隣接する土佐市では、レトロな雰囲気な中心商店街巡りが好評である。また、その隣の須崎市では先日、ガイドブックに載らないような「日常」的な風景を観光資源とするツアーが人気を集めた。

ここで挙げたまち歩きのコースの中には、有名な巨大建造物もなければ最新鋭のアミューズメント施設もない。しかし、そこには長年多くの人々が暮らし、脈々と紡いできた時間の流れが感じられるのである。100年前に作られたものには、それに携わった100年前の人々のドラマがあり、背景がある。たとえ龍馬のような大人物がかかわっていなくとも、そこには確実に人間の歴史があるのだ。それに触れることのできるまち歩きは、まさに過去との対話、時間旅行とも言えよう。

高知県立坂本龍馬記念館　TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
〒781-0262 高知市浦戸城山830　http://ryoma-kinenkan.jp